

【主な質疑項目】

1. 野田総理によるTPP参加表明について

○山田俊男君

自由民主党の山田俊男であります。野田総理と質疑できないのは残念でありますけれども、しかし、満を持してTPPにつきまして各閣僚に質疑したいというふうに思います。率直な意見交換にしたいと思いますので、どうぞよろしくをお願いします。

最初に、藤村官房長官にお願いしたいんですが、全ての物品とサービスを自由貿易交渉のテーブルにのせるということで、これが総理の発言として、米国はホワイトハウスのホームページに掲載しているわけがあります。米国政府は発表は訂正しないというふうに言っているし、それからさらに、日本政府も訂正を求めないということのようではありますが、間違いなのであればきちっと訂正を求めるべきであります。なぜ訂正を求めないのか、お聞きします。

○国務大臣（藤村修君）

昨日も総理御自身が何度かお答えをさせていただいておりますが、発言については、何度も言っておりますが、交渉参加に向けて関係国との協議に入るということでありまして、それ以上でもそれ以下でもない。向こう側が今日までの様々な日本の、去年の十一月以降の話ですが、を総合して一つの解釈として向こう側は、米側は米側で発表された。

基本的にTPP交渉というものが、これは今九か国で行われている、その原則というのは全てのものをテーブルにのせてということである、そのことを向こうはおっしゃっているけれども、日本は、少なくとも、昨日総理も申しておりますように、いわゆるセンシティブ項目など、必ずこれはテーブルにのせてと言ってもあるわけで、今からの交渉で、今始まってもまだいない交渉の中で、総理はそれ以上でもそれ以下でもない発言、そのことをおかしいと、訂正とそれから撤回を求めたということではございました。

しかし、その中でアメリカ側も総理の発言はこういうことであるときちんと理解をされたということで、それで一つの区切りを付けたと、テーブルにのっている案件は今後もきちっと交渉していくと、こういうことだと思えます。

○山田俊男君

お手元の資料に、枝野経済産業大臣が、首脳会談前日のカークUSTR代表と会談の前にペーパーを読んでおられる写真があるわけでありませう。テレビの映像からこれは取ったものでありますが、まさにその内容たるや、ホワイトハウスのホームページに載っていたもの、全く内容そのものじゃないですか。枝野大臣はこの内容をカーク代表におっしゃって、そのことが日本側の見解として、総理の発言として発表されたということじゃないんですか。

○国務大臣（枝野幸男君）

まず、配付資料に、これがカーク通商代表との会談の確認作業をしている枝野経産大臣が手にしていた資料の映像とありますが、これは事実誤認であります。これは、ニュージーランドの貿易担当大臣との会談前の打合せを撮らせてほしいということで、そこについて日本テレビのカメラが入ることを許したものでございます。まず、それが事実関係として違います。

それから、この紙自体が、私は野田総理の記者会見の前に日本を立っておりまして、その前の段階で、ある条件、前提条件で仮定を置いた上で資料を事務方が用意したものでありまして、ここの紙にもありますとおり、この前提になっている野田政権としての決断の内容は実際に決断をした内容と違っていています。その上で、私自身、例えば各国の大臣との会談もそうですし、それからこの国会での答弁もそうですが、事務方が資料を用意してくれて、その中には役に立つ情報も少なからずありますが、基本的には事務方の作った紙を読むようなことはありません。

その上で、私は、ここに書いてあるようなことをカーク通商代表との会談でお話は申し上げておりませう。

○山田俊男君

枝野大臣は言っていないというふうにおっしゃる。ましてや、この紙については、総理の会談前にまとめた資料を参考に見ただけだというふうにおっしゃっている。しかし、総理は言っていないというふうにおっしゃっている。しかし、ホワイトハウスのホームページには載っている。全く同じ文章で載っているわけじゃないですか。その辺、もう一度ちゃんと聞きます。必ず影響を与えているでしょう。

○国務大臣（枝野幸男君）

総理の記者会見の前に私は日本を出発しております、その時点でかなり分厚い資料で、いろいろな可能性がありましたので、それぞれの場合についてどういう対応をするのかということについて事務方が用意してくれた紙であります、まさに決断の内容がここに書いてある紙の前提条件と違った記者会見の内容になっておりますので、全く実際の会談では参考にいたしておりませんし、そもそもが、何度も申し上げておりますが、私自身、国会の答弁もそうですし、それから外国の首脳との会談もそうですが、事務方が紙を用意しても、その紙を読むようなやり方は一切しておりませんので、ここに書いてあることを私は会談でこういう表現で申し上げてはおりません。

○山田俊男君

結局もう総理の発言だと出ていてそれを訂正しない。訂正しないということであれば、それはもう世界中にそれを認めたということではないわけじゃないですか。その背景の中に枝野大臣の重要な、重要な一つの行為があったと。何で総理が発言される前に、発言される前でしか私は承知していないと、そんなばかな話ないでしょうが。これだけ機器が、ちゃんと情報、はっきりしているわけですから、幾らでもちゃんと承知できるわけでしょう。何でホームページにそんな形で載っているんですか。

○国務大臣（枝野幸男君）

ですから、この紙が作られたのは、内閣として総理の御判断をいただく前の段階で、どういう決断がなされるのか、どういう結論がなされるのか分かりませんでしたから、いろいろな可能性について、それはそれぞれの可能性の、こういった場合にはこういった交渉をしなければならぬんだなということを事務方が気を利かせて準備をしてくれた紙の一つであって、実際にこの紙を見ていた映像が撮られた時点では、御指摘のとおり、日本の国内において総理が記者会見をされた記者会見の内容、あるいはその前の閣僚委員会の内容はもちろん承知をしておりましたので、この紙の前提とは違う御発言だからこの紙は使えないということでもあります。

したがって、この紙は参考にも使っておりませんし、そもそも参考にしても私はあの紙を読んだりはいたしませんし、実際にカーク通商代表との会談に多分この紙は持ち込んでいないというふうに記憶をしております。

ます。（発言する者あり）

○委員長（石井一君）

答弁が聞こえませんよ。御静粛に願います。

○山田俊男君

それにしても、ホームページの発表と、それと事実関係は明確に異なるわけで、一体、外務省はちゃんと本当に抗議したんですか。抗議したと言っているだけじゃないんですか。外務大臣に聞きます。

○国務大臣（玄葉光一郎君）

抗議をしたかと、訂正を求めたかということでもありますけれども、訂正をホワイトハウスの担当者にそれは一旦求めたということは事実であります。

○山田俊男君

本当に、じゃ一体、誰がどんな形で、外務省、申し入れられましたか、お聞きします。

○国務大臣（玄葉光一郎君）

あのときに片上大使からホワイトハウスの担当者に訂正を求めたというふうに報告を聞いています。

○山田俊男君

相手はどなたですか。

○国務大臣（玄葉光一郎君）

ちょっと今特定はこの場でできませんけれども、ホワイトハウスの関係者、担当者というふうに聞いています。

○山田俊男君

要は、全く、こういう雰囲気、言うなれば、ホワイトハウスのホームページに載っていたこと、さらには、枝野大臣が紙は参考資料だ、あくまで、それは言わなかったというふうにおっしゃっているんだけど、だけど、その内容で、そのままで事態が進んでいるわけじゃないですか。

一体、そういう形で事実が進んでいるということの問題について、官

房長官、これはもう物すごく違うじゃないですか。国内における総理の御発言と、さらにはアメリカでやっていることが全然違うということじゃないですか。

○国務大臣（藤村修君）

まず、事前の協議に今から入るということでもあります。それから、先ほども申し上げましたように、T P P交渉、九か国で既に進んでいるものの枠組みというのは、今回米側が言っていること、それはそれでテーブルにのせると、そのことは間違いでないわけでもあります。

我々の方は、もちろん国益をしょって、センシティブな項目もありますが、今からそれをまさに交渉しよう、ということでもあります。そのことで、今ここでそれがどうだああだと言われるのはちょっとまだ、今からの話をきちんとフォローしていただきたいと思います。

○山田俊男君

もう既に米国から、牛肉、それから自動車、保険で注文が付いているというふうに報じられているわけでありませうけれど、これはどういう場面でどういう形が出てきたものですか。外務大臣にお聞きします。

○国務大臣（玄葉光一郎君）

事実関係のお尋ねだというふうに思います。カーク通商代表は、十一日のホノルルのA P E Cにおける記者会見で記者から、今、山田委員が指摘された、いわゆる御指摘の三分野が米国の関心事項かというふうに問われたのに対して、それらの分野が米国にとっての懸念事項であり、これまでどおり二国間で働きかけていく旨述べたというふうに認識をしています。

○山田俊男君

これまでどおり二国間での交渉を続けていくと。言うなれば、まさに事前協議がもう既に始まっていて、そして米国から注文が付いているということ以外の何物でもないじゃないですか。一体、そういう形でどんどん出てくるものに対して、どんな形で整理して、どんなふうに結論をお出しになるんですか、外務大臣。

○国務大臣（玄葉光一郎君）

おっしゃるように、いわゆるT P P協定の交渉の中で議論するものも

あれば、いわゆるその前に事前に調整をしなければならない、あるいは、あくまで二国間の懸案事項としてT P P交渉とは別に解決をしていかなければならない、そういう課題というのが出てくる可能性は私は大いにあるだろうというふうに思います。

ですから、T P P協定の交渉とは別に、あくまで個別に二国間の懸案事項として何が対応可能で何が対応困難なのかということを確認しながら、これは適切に対処していくということになるろうかと思えます。

○山田俊男君

玄葉大臣、牛肉や自動車や保険については二国間で申入れがあった、議論があった。これは、T P Pの協議の課題とは違うという理解ですか。

○国務大臣（玄葉光一郎君）

基本的には、今出てきた事項というのは個別に二国間で懸案事項として対処していくべき事項であると、基本は。そういうふうに考えております。

○山田俊男君

もう既に対日年次改革要望書があったり、日米経済調和対話、そういう会合の中で様々な要求は来ているわけじゃないですか。それらが全てこの事前協議の対象になっていくということでしょう。どうですか、もう一回ちゃんと聞きます。

○国務大臣（玄葉光一郎君）

いや、これは、山田委員、じゃT P P協定の交渉と例えば牛肉の問題というのは、B S Eの話というのは、じゃ同じことなのか、つまりT P P協定交渉のまさに事前の同意の条件なのかというと、これはもう別なんです、全く。だから、全く個別なんです、個別なんです。個別に、T P P協定交渉とは別に、個別に解決をしていく課題であるというふうに認識をしているということです。ただ、恐らく米国は、おっしゃるように、そういったことを、あるいは自動車の問題もそうかもしれません、確かに、そういった問題をいわゆる協議の中でいろいろと言ってくると、そういう可能性は私は十二分にあると思えます。ですから、そのことについて個別にきちっとやはり対応していくと、それは必ずしもT P P協定交渉とは場合によっては切り離しながらきちっと対応していくということが大切だというふうに思っています。

○山田俊男君

もう全く整理ができていないということは明らかだ。牛肉の問題について、今印象でおっしゃったかもしれぬけど、自動車とか保険の問題はどうか、それじゃ。自動車とか保険はまさにT P Pの主要なテーマになるじゃないですか。

○国務大臣（玄葉光一郎君）

自動車につきましては、確かにカーク代表は記者会見で記者に聞かれて、関心事項であると、これはもうかつてからそうだといいことでもあります。じゃ、米国側の関心事項とされる自動車についてのその具体的な内容は何なのかという、もう率直に言って分からないですね。分からないという意味は、いや、今までの要求もそうなんですよ、つまりは、非関税障壁、非関税障壁、市場が閉ざされている、閉ざされていると言うだけで、具体的に、じゃ何が日本の市場閉ざされているんだと聞いても答えないというのが率直なところです。つまりは、アメリカ車、米国車が日本で売れないということを行っているにすぎないですね、現状は。じゃ、ヨーロッパ車はどうなのかという、実はアメリカ車より売れていると、同じ市場でもですね。

ですから、そういうやり取りはそれはあるでしょう、これから。今のところ、具体的に何が悪いんだと、日本のと言っても、答えられないというのが今の現状だというふうに認識しています。

○山田俊男君

これはT P Pの範囲内のことだと、これは個別交渉のことだと。そんなことはあり得ないでしょうが。その一連の中で事態が進んでいくわけでしょう。要は、そのことについての認識が全くできていないということなんだ。枝野経産大臣、どんなふうにお考えですか。

○国務大臣（枝野幸男君）

T P Pの協議において何がテーマになってきているのか、あるいはテーマになり得るのか、なりそうなのかという問題と、それから日本と米国との間で通商関係について、これはT P Pにかかわらず、従来から例えば自動車についても牛肉についてもアメリカはアメリカの言い分があって、日本には日本の言い分があって、これについてはこれまでも協議をしてきていますし、これからも、T P Pいかんにかかわらず、相手国から申入れがあったことについては協議はするのは当然のことだという

ふうに思っております。

そのこととT P Pの俎上にのるテーマであるのかどうかというのは、むしろT P Pという、米国にとどまらない、少なくとも今九か国の間でどういうものが協議の対象になっているのか、なり得るのかということによって決まってくるという問題でありまして、アメリカが、カーク通商代表が御関心事項とされた三点については、T P Pにかかわりなく、従来から米国の関心事項として協議の俎上にのっているものであり、それは向こうの関心がある以上はこれからも協議をするということですが、我が国としても我が国としての主張がありますから、これまでもそれを主張してきましたし、これからもそれを主張していくということです。

#### ○山田俊男君

あらゆる物品とサービスをテーブルの上に乗せるというふうには、日本は言っていないからといって、向こうはホームページに載せているんですよ。だから、あらゆる物品とあらゆるサービスがもう既に交渉のテーマになっているということなんだよ。とすると、協議の上、結論を得るというふうには総理はおっしゃっている。昨日の当委員会でも、得た情報は国民にきちっと伝え、説明責任を果たすというふうにおっしゃっているんだ。一体、どういう手順を踏んで、どういう判断基準で結論を得ていくんですか。どういう手順を踏まれるんですか、これは。

#### ○国務大臣（枝野幸男君）

日本は過日、交渉参加に向けて協議を始めるということを表明した段階で、まだその九か国との間で具体的な交渉参加に向けた協議はスタートしておりません。もちろん、事前の様々な牽制というような趣旨でとらえ得るような発言があることは否定いたしておりますが、じゃ、これから具体的にどういうふうに議論をするのかということ自体、相手国との関係でこれから決まっていきますので、そういったものについては、決まり次第というか、決まるプロセスにおいて公表しながら、その中で交渉のやり方によって国内的な議論の進め方とか周知の仕方というのはおのずから決まってくると思います。

#### ○山田俊男君

鹿野大臣、鹿野大臣は参加でなくあくまでも協議だと、その後入るかどうかが結論を出すというふうには会見でおっしゃっているんだよ。鹿野大臣は、どうですか、今のやり取りから見るとみんな外されているんじゃない

ないですか。もう協議に入っているんですよ。だから、いつ何どき鹿野大臣は、それじゃ、重要問題に対してどんなふう手順を踏んで、どんな結論をお出しになることになるんですか。

○国務大臣（鹿野道彦君）

今、枝野大臣から言われたとおりに、まだ交渉参加に向けての協議には実質入っていませんと、こう言われたわけでありまして、そういうふうな意味では、新聞報道等々におきましては、牛肉とかあるいは簡保とか、あるいはまた自動車とかということについて俎上にのせるというふうな報道がありますけれども、その中身がどうであるかというふうなことは、これから協議に入ってどういうことを求めるかというふうなことでありますから、それをしっかりと把握をして対処していくというふうな、そういう認識に立っております。

○山田俊男君

これは個別協議、これはT P Pの範囲なのかもしれぬというふうに、頭の中が全く整理付かないまま交渉に入っていて、あらゆることが向こうから提案されてきていて、それについて対処のしようがない、それぞれが、分類のしようもない、手順も決まっていない、判断基準も決まっていない、これが中身じゃないですか。一体どうするんですか。

○国務大臣（枝野幸男君）

繰り返し申し上げますが、少なくとも、私もカーク通商代表を始め、九か国のうちの幾つかの国の通商担当大臣とホノルルで会談をいたしました。私どもの交渉参加に向けて協議を始めるということに対して歓迎をするというコメントございましたが、じゃ交渉参加に向けてこういうことだ、ああいうことだという実質的な交渉はまだ始まっておりませんし、また、どういう場でどういうふうに協議をするのかということ自体はまだ決まっておりません。

まさに、今回の交渉参加に向けた協議を始めるという私どもからの発信に対して、決断に対して、これからその交渉参加に向けた協議をどういうふうに進めていくかという協議が始まる段階でありまして、そうしたことの中で、もちろん私どもは、これは総理も何度も申し上げておりますとおり、我が国としての国益をしっかりと考えて、そしてその国益の観点から協議を進めるわけでありまして、それについては、まず相手方の主張自体も、一般的な通商交渉としての関心事項は確かにカ

一ク通商代表はおっしゃっておりますが、T P P交渉参加に向けた協議として何を求めてくるのかということについても、まだ相手方が何も言っていない段階でこちらが何か申し上げる段階ではないと。ただ、何をおっしゃられても、私どもとしては我が国の国益の観点から判断していくということであります。

○山田俊男君

玄葉大臣にお聞きしますが、御案内のとおり、米国はファストトラックの条文、今は変わりましたが、慣例に従って議会に対してちゃんと承認を求めて進めると言っているわけだ。その議会に対して、議会が様々な要求があるから、その議회를説得するための事前協議が何か月間か掛かると言っているんだよ。とすると、その事前協議にあらゆる形が出てくることごとがみんな議会の承認に絡む話だし、ましてや、議会の承認をもらって政府がその権限内で交渉するというT P Pの内容と全く一致するわけじゃないですか。だから、区別できないんですよ。

それで、さらに、T P Pというのは物すごい秘密主義なんです。それはそうだ、交渉は秘密主義なんだよ。秘密主義だからこそ、メンバー国であるオーストラリアだって、情報が全然入ってこない、一体どうなっているんだと、もっとT P P交渉の透明性を高めるべきだと言っているんだよ。そのことを御存じだったですか。

○国務大臣（玄葉光一郎君）

まず、後者の方は、確かに私も条文を、ドラフトを、たしか片山先生だったと思いましたがけれども、ここで、もらっていないのかという問いに対して、もらっていませんと。実はもらう努力しているんです。だけど、交渉に入っていない、しかも毎日動いているという状況の中で、確かにドラフトもらえないんですね。

ですから、今オーストラリアの話がありましたけれども、確かにある意味、交渉参加国の中であるいはバイで、その中でバイでやる場合もありますから、そういう中でその情報というのが透明性が高いかと言われると、おっしゃるようなところがあるのではないかというふうに思います。あと、前者の話は何でした、前者の話は。

○山田俊男君

いや、いいです。結局、こうなってくると、交渉に入ったら秘密主義なんだよ。ところが、交渉に入る前に、もう実質的に全部政府に権限を

委ねるためのあらゆる議論が出てくるんだよ。議会からあらゆる注文が付くんだよ。その注文に対して、一体日本はどうするんだという前提条件が求められるわけだ。だから、全てもう交渉に、議会から承認をもらう前にもう既に多くのことがもう決まっている、覚悟を求められているということなんだよ。そのことについて認識、全然ないんじゃないですか。

○国務大臣（玄葉光一郎君）

山田委員が米国議会との関係を言われました。米国議会との関係というのは、確かに一番これからのキーになることは間違いないというふうに思います。つまり、米国だけは議会で九十日前に通知をしてほしい、その前に事前の調整をする。つまりは、見通しが付いて通知をします。それは仕組みの違いで、日本とですね、いわゆる米国議会が元々通商権限を持っている、それをいわゆるUSTRに言わば議会の権限を与えているということでもありますから、そういう意味で、当然、議会との関係で様々な懸案事項に対して対応していかなくちゃいけないという場面というのは出てくる可能性は十二分にあると思います。そのときに、まさに何が我々是对応可能で何が駄目なのかということを確認しながら適切に対応すると、こういうふうに申し上げているわけです。

○山田俊男君

総理はこう言っているんだよ。交渉の途中で情報だけもらって、それを日本の国民に周知し、参加できるかどうかの結論を得るとね。だから、そういう形でやるということになっちゃうと、一体いつ何どきどういう手順を踏んで、そして参加判断、結論を出すんですか、官房長官。

○国務大臣（藤村修君）

韓国と米国の例のFTAのときも少し参考にさせていただいているんですが、今早急につくろうとしているのは、今政府部内で、各省にまたがりますので、まず内閣で一体となってやるために、一つは外交交渉チームといいますか、ここの強化。それから情報提供は、もうさっきからおっしゃっているとおり、これをいかに情報提供を素早く密にしていくなかという、この考え方。さらに国内調整、これは各省庁それぞれにございます、様々な問題でそれぞれの省庁の考え方もある。それからさらに、国民の皆さんに広く知らせていくという国内対策。この辺のことをしっかりやっていくための体制を早急に今つくろうとして準備をしてい

るところでございます。

○山田俊男君

もう交渉の手順も判断基準も、さらにアメリカの交渉の仕方も議会との関係も、ほとんど整理が付かないままこのままTPPに突入したら大変なことになっちゃう。絶対に表へ出てこれなくなっちゃう。日本は首つるしかなくなっちゃうんだよ。だから、ここは、絶対にここで参加はやめなきゃ駄目。そのことをもう嚴重に申し上げる。

じゃ、参加やめて、あと日本という国どうするんだというふうに、枝野大臣、あなたもちゃんとおっしゃっているんだよ。何言うかといったら、アジアの成長力を中に取り込んで、そしてFTAAPに発展性を持たせなきゃいかぬと、こういう観点だ。そういう御発言でおっしゃっている。私もそのとおりだというふうに思うんだけど、TPPの形と内容が悪いと言っているんだ。アジアの国が、一体今の厳格な関税撤廃のTPPに入れるというふうに思いますか。

○国務大臣（枝野幸男君）

何度も申し上げておりますとおり、FTAAPに向けては、TPPとASEANプラス6、ASEANプラス3と、この三つのルートと申しますか、これが議論をされております。そうした中で、今現実の交渉が進んでいるのはTPPということで、それに対してどう対応するかということが我が国として判断を求められておりますが、一方で、これらは相互にそれぞれの国益の観点から全体の状況を見ながら各国とも判断をしていくことでありまして、今般も、TPPについて我が国だけではなくてメキシコやカナダなどの考え方なども表明されたこと等がいろいろと影響を受けているんだと思いますが、なかなかASEANプラス6やASEANプラス3について、関係国、特にASEANの諸国の動きというものが具体化をしないという状況が続いてきましたが、例えば今、実際にバリではASEANプラス6をもっと前に進めようじゃないかという動きにつながってきています。こうしたことが相互に連携をしながら、相互に刺激をしながら、遠くない時期にFTAAPへつながっていくというふうに思っています。

○山田俊男君

これで終わりますが、とにかく日本は、アジアの成長力を取り込むというのなら、アジアとの連携、アジアのリーダーとしての役割を果たし

## 参議院予算委員会／2011年11月17日

て、TPPの内容については、形と内容が悪い、日本は入れないというふうな言明をすべきだというふうに申し上げて、終わります。